



見習運転



(北急電鉄物語16)

北急電鉄の運転甲組に属し、優等列車を含めた運転に励む来嶋運転士のもとに、新米の研修運転士・幡野（はたの）がいた。

制服を脱いで、いかにも今風の若者の私服姿になった幡野に、来嶋は「やっぱり平成育ちだね」と感慨を口にした。

そんな彼を来嶋はあたたかく歓迎し、ささやかな宴ではあるが一緒に運転区前の焼き鳥屋で焼き鳥を食べ、研修の始まりを祝った。

運転士養成所を卒業した幡野は、これから来嶋を師匠として、運転の実習を行うのだ。

若手だった来嶋も、ついに見習いの師匠となる時が来たのだった。



来嶋の指導で幡野が研修をする車輛は、各駅停車運用に入っている旧5000形が中心だった

。その旧5000形は応荷重ブレーキのない縦軸2ハンドル制御の旧式車である。

このハイテク車輛の時代に残った、化石のような退役寸前の車輛では、ただ停止位置を守るだけでも難しい。

空転検知システムもなく、雨の日は不用意な起動をすると、動軸の空転も起きる。

来嶋はその難しい車両の運転で、手を添えてマスコンとブレーキの扱いを教える。

「この車は一番電車運転の基本を学ぶにはいい車なんだ。」

これに慣れていけば、どんな電車でも適応して運転できる技量が身につく」

来嶋は制服に指導運転士、幡野は見習い運転士の腕章を巻いている。

「運転は手の操作のコンビネーションのなめらかさ、よどみなさも大事だが、まず一番は、その前に眼を鍛えること。」

動体視力と言うが、そのためにも時間さえあれば木々の緑をよく見て、視力を鍛える。

そして、線路だけを見てちゃダメだ。周りにも目を配り、そしてなにかあったら次に何が起きるか、常に先を読む。

運転操作の目印の物を見つけるのも当然だけど、運転席の椅子に座る尻に伝わってくる車輛の挙動の感覚も大事。

それと、停車時にはできれば側開戸の窓を開けてホームを確認する。

目視はそこにも大事だよ」

「ホームの監視ですか？ 駅員と車掌もしてくれますよね。

お客様の乗車具合の確認ですか？」

「まあそれもあるけれどね。

走行中にも、それ以外の時も、視野を広く、そして集中するところに集中する。

矛盾しているようだけど、それは熟練しかない。

僕は教えることは教えるけれど、教える以上に君が学ばなきゃ、君は一人前の運転士にはなれない。

まず運転時の標識以外の目標物のメモ、僕のをあとで見せてあげるよ。よく見て。

機械でコピーしちゃだめだけどね。

ちゃんと自分の手で書き写しながら、風景の記憶と対照するんだ。

でも、気張り過ぎはだめだよ。

無駄に消耗してもいけない。自分のペースも守って。自分の健康や技術も過信しないこと」

来嶋は優しく教えた。

「よく先輩の技を盗めとかいうけどさ、僕、そう言うの嫌いだから。

学べることはきちんと学べばいいし、教える側も、教えられることは教えるべきだ。

その上に、『教えることのできないけれど学ぶべきもの』がある。

それを受け継ぐ場に、制裁なんてもってのほかだ、と僕は思ってる」

幡野は、来嶋のその言葉に、強い信頼と親しみを抱いた。

そんなある日だった。

「これってあれのパクリですよ」

話所での休憩時間、幡野は、自分の読んでいたマンガ雑誌の鉄道漫画について、来嶋に言った

。「まず停めるが鉄則の鉄道で、停めちゃいけない、っていう例外のケース。
トンネル火災とかの話と同じじゃないですか」

来嶋が一瞬顔を曇らせた。

「トンネルの火災では乗客の脱出できるところまで運転を継続し、そこにたどり着いてから停車し乗客を避難させる。

安全のために『まず停まれ』が基本の鉄道の、数少ない例外ってネタ、昔からありますよ。

要するにパクリじゃないですか」

それに来嶋は答えた。

「簡単にそう他人をパクリ呼ばわりしちゃ、だめだ」

「だって」

「『だって』はない」

幡野は不審がったが、来嶋は特にそれ以上何も言わなかった。

そしてその向こうでは、休憩中の教導運転士・梅沢が、のんびりと鼻毛を切っていた。



そのあとの教習運転の時だった。

雨のふるなか、満員の各停列車を運転してきて、複々線区間の地上駅に進入するとき、車内電話のブザーがけたたましく鳴った。

『こちら車掌！ 中間車の床下で白煙が発生しています！』

『承知！』

幡野は電話に答えて即座にブレーキを操作しようとした。

だが、来嶋が叫んだ。

「ここで止めるな！ このままいけ！」

「危険です！ ここは止めないと！」

「いいから止めるな！」

「でも停車場外で停車するなんて！」

「ブレーキは僕が操作する！ 手を離せ！」

叫んだ来嶋は、駅を通過して、なおも通過する架線柱を数えた。

「ここで止めるんだ」

駅を通りすぎてブレーキをかける来嶋の声は、微かに震えていた。

幡野は、何が起きたのか理解できなかった。

結果、緩行線の幡野と来嶋の列車は場外で停車していた。

車輛の不具合は幸い火災には至らなかったが、大事をとって乗客は係員に誘導されて線路上に降車し、駅へその線路を歩いて移動して脱出することになった。

北急線はそのために全線運転見合わせとなった。

その結果列車が何本も運休・遅延し、乗客の他社線への振替とその混乱は、その日長い時間続いた。

故障した旧5000形の車輛を調べ、それを車輛基地へ救出運転した検車係たちが、夜になって話をしていた。

「旧5000も、交換部品の調達もこれでギリギリだしな。やはり世代交代か」

「残念だけどな。北急（うち）といえはこの旧5000だったのに。名車も時代には勝てないな」

「寂しいよ全く」

「でもやっぱりこの判断は主席教導運転士の梅沢さんの愛弟子の来嶋さんだね。」

あそこで止めなかった判断はあまりにも難しいよ。

普通まず停まれだからね。

結果的に停めたけど、でも来嶋さんらしい、良い判断だ」

えっ？

幡野は理解できなかった。

その来嶋は、運転士詰所のデスクで、パソコン相手に始末書を一生懸命書いていた。

そのとき、梅沢が声をかけた。

「おい、幡野」

梅沢は何かをこらえたが、すこし押さえ気味に口にした。

「お前な、他人をパクリ呼ばわりしてたよな」

幡野は理解できなかった。

「よく思い出してみろ。」

あの時、すでにダイヤは乱れていて、あの駅を通過する急行線には徐行している急行列車がいた。

対向線には同じく徐行で通過中の急行と停車中の緩行線電車がいた。

しかもあの通過駅のホームにはラッシュでお客さんがいっぱい、しかもホーム工事がおこなわれている駅で工事用の仮囲いが大きくあった」

幡野はようやく気付いた。

機器故障で起きた車両の発煙が、火災になってさらにひどくなる可能性があって、

あの駅で停車していたら、

火災から乗客を脱出させるためのスペースがどこにも無かった！

そんな判断！

「機眼って言うんだ。全体を見て、何かおかしい、とさっと気づく。

集中して前だけみていたら気づかないんだ」

梅沢が休憩所でいう。

「はっきり言って、来嶋は甘い」

梅沢は怒りを吐いた。

「来嶋の立場が俺だったら、問答無用でぶん殴ってるぜ、お前を。」

他人をパクリって言うんだったら、なんでその類似点に気づく頭で、緊急時に事例と事態の類似点に気づいて、すぐに対応できないんだ？

お前、自分の知識の無さを棚にあげて、他人にケチつけてたがな、他人のことを安易にパクリ呼ばわりしても、お前、そのパクリすらできないじゃないか。

トンネル内の火災に似た状況だったのに、お前は何も類例から学んだ判断ができてないじゃないか。

一体お前は何を学んできたんだ？

少なくともそんな安いケチ付ける資格はお前にはない。

そんな視野が狭いお前が、そのうえこの今、何やってんだ。

本来お前が書くべき始末書を来嶋がこんなになって書いていて、

お前はこうしてふらふらしてて、なんで平気なんだ？

ふざけるな、お前。

本気で、お前、時代が時代だったら鉄拳制裁ものだぞ。

来嶋は甘すぎる。

今回の事件がこれですまなくて火災事故になって、煙吸ったりして怪我人が出てたら、お前、どうするつもりだったんだ？！」

幡野は、恥ずかしさに顔が真っ赤になった。

「今の時代、鉄拳制裁はご法度だから、それをしないが、お前、おもいっきり、道を踏み外してるぞ」

幡野は声をしぼり出した。

「すみません」

そのときだった。

「俺に謝るな！！」

その梅沢のものすごい大怒声に、詰所の皆が振り向く。

「お前は、本当に謝るべき相手も、まだわかんないのか！！」

「来嶋さん、すみませんでした！」

来嶋はそう幡野に言われて、『今ようやく書類できて、社に送信するところだから、ちょっと待ってね』、と言って、IDをカードリーダーに入れて認証して始末書を送信し、そして言った。

「え、なんのこと？」

「梅沢さんはそう鉄拳制裁を言うけどさ、あのひと昭和の人だから。今の時代はそういうことじゃ、若い人が育たない。それあの人わからないんだよ」

来嶋は笑ったが、その目の下にくまが出来ていた。

「僕もよくミスして先輩に殴られもしたけどさ、そういうことでは今の子は育たないよ。

まあ、今回は今回として、これを理由に無駄に気張り過ぎないこと。

いつか甲組に入ったら、全線通しの優等列車の単独運転もあるんだ。

あんまり張り詰めてたら、体壊すよ」

「私には、とてもそんな甲組になれる気がしません。運転士だって」

「いや、僕も君みたいな頃、なれる気しなかったから大丈夫だよ。

君だけじゃないさ」

来嶋の優しさが、幡野には本当に辛かった。

こんな人に自分は、なんてことをしてしまったんだろう。

「なにか僕にあやまるんだったら、その分頑張っ、いい運転士になって、お客さんの安全にすべてを尽くすんだ。

そうでないと、僕の教え甲斐がないからさ」

来嶋は、そう笑った。

「まず、その気持ち、わすれないこと。

僕もそういう気持ちがあるから、こうやってるんだから」

幡野は、深く頭を下げた。

時代は代わっても、こうして人から人へ、世代から世代へ、ノウハウがリレーされながら、鉄道は輸送機関としての安全を守られていくのだ。

<了>